

2018年10月15日

洞爺湖有珠山ジオパーク推進協議会

会長 真屋敏春様

参加者 有珠山周辺地域ジオパーク友の会

佐藤 恣



第9回日本ジオパーク全国大会
アポイ岳(北海道様似町)大会参加報告

2018年10月6日～8日に開催された第9回日本ジオパーク全国大会アポイ岳(北海道様似町)大会に、貴会より旅費等の援助をいただき参加しましたので、別紙内容により参加報告書を提出します。

尚、大会内容を記録したDVDを添付しますので利用いただければ幸いです。

**第9回日本ジオパーク全国大会
アポイ岳(北海道様似町)大会参加報告**

参加日程 10月5日(金曜) 壮警出発 浦河町内ホテルに宿泊
6日(土曜) 浦河町ホテル発 様似町大会会場着
大会参加者受付業務打ち合わせ(午前8時～)
大会参加者受付(午前8時30分～)
九州ブロック担当(午前9時30分頃まで)

開会行事 様似町中央公民館文化ホール 10:00～10:10
オープニングアトラクション
様似町民族文化保存会のみなさんによるアイヌ古式舞踊
開会セレモニー
主催者あいさつ 実行委員会委員長(様似町町長) 坂下 一幸
最初に、「ようこそ様似町においでいただきありがとうございます
た。皆様様似町長の坂下一幸です」とアイヌ語でのあいさつに驚く。
あいさつの内容は、大会要項2ページ参照。
共催者あいさつ
日本ジオパークネットワーク理事長(糸魚川市町) 米田 徹
日本ジオパーク委員会委員長(東京大学名誉教授) 中田 節也
歓迎のあいさつ
実行委員会名誉実行委員長(北海道知事)高橋はるみ 代読副知事
来賓紹介と祝辞
道内選出の国会議員3名出席、2名より祝辞あり
JGN認定証授与

JGN表彰
表彰状 久保 雄
感謝状(特別功労商) 北海道地図株式会社

基調講演 11:15～12:10
ジオパークの魂～世界ジオパークネットワークの活動～
講師 ニコラス・ゾウロス
(ギリシャ・エーゲ大学教授、
世界ジオパークネットワーク協会会長)
講演は英語で、ビデオカメラ操作と同時通訳両方の記録は困難
なため、浦河町にある日高日報新聞で講演の趣旨が記事として
掲載されておおり引用する。

「ジオパークの魂」

ゾウロス世界会長が講演

世界ジオパークネットワーク協会の活動経過、事業内容や世界38か国140地域の特徴や活動事例を取り上げ、アポイ岳はかんらん岩の地質と美しい花が見られることで貴重な場所であると説明。

ジオパークのゴールは、持続可能な発展として保全・保護を通じて地理的遺産が地域の人々のためにそして人類のために重要なこと。

ジオパークは、地域の保護、生活、発展、利益、雇用拡大に影響を与えているという。また、子どもたちの手の届くものにするために環境教育も必要となる。

高品質な活動を保つことにより国際的、国内的にも観光客を呼び込める効果もある。効果的なツールであり続けるためにネットワークと交流(情報やアイデアの共有、効率的な運営など)を深め、より良い知識をつけていくことが重要で、ネットワーク協会は保全、保護を通じて世界的に地域を支援している。

10月7日 「日高日報」より

尚、10月13日付北海道新聞特集「様似で全国大会 道内の事例報告」の中で基調講演内容要旨は下記の通り。

ネットワーク化で地域を支援

ニコラス・ゾウロスさん(52)

世界ジオパーク提唱者、ギリシャ・エーゲ大教授

2004年に「世界ジオパークネットワーク」が結成されて以来、運営管理や観光の基準を定め、国際会議を通してネットワークの強化を図りました。世界的にはあまり知られていなかった地域の注目度を高め、持続可能な発展に確固たる結果を残してきました。

ジオツーリズムは「世界の特徴的な地質、文化を保護しつつ、住民の安寧に資するもの」と定義できます。多くのインフラ整備は必要ありません。ガイドウォーク、トレッキング、ボートクルーズなどさまざまな方法で、訪問者に「次世代のために保全保護しなければ」と感じさせることができる。若者の新たな雇用も生まれます。

一方で、一般の人が地球の働きを理解できるよう、科学的に複雑なジオサイト(見どころ)を分かりやすく説明することが必要です。(長崎県雲仙火山の噴火災害を伝える)島原半島ジオパークのように、過去の自然災害の記憶を活用した社会教育にも取り組んでいかなければなりません。

せん。

世界ジオパークには4年に一度、膨大な書類提出や現地調査を伴う再認定審査があります。「国際的なネットワークに加盟する必要があるのか。海外の観光客も来ないじゃないか」と言う人もいますが、世界審査によって高い質の活動や運営を保つことができます。

ジオパークを目指すゴールは地域コミュニティを支援すること。それを可能にするのは、目的と経験を共有する私たちのネットワークにほかありません。

一緒にやればできます。

10月13日 「北海道新聞」より

～～～台風の影響による影響～～～

会場の体育館前の広場に特設された町内等の特産物即売会場は、台風接近による余波を避けるため早々に店じまい、7日急遽役場内のロビーで物産即売会が開催されなど、台風の影響を受けながらの大会開催であった。

*****分科会討議に参加して*****

第9回大会の分科会は分科会1から8まであり、どの分科会もテーマを見る限り難しい内容であり、申し込み段階では分科会1の「ジオパークが担う普段の減災・防災活動って何？」を希望申し込みしたが、あまりにも参加者が多く急遽、分科会6に変更参加する。

分科会6・自然災害とユニバーサルデザイン

すべての人が心地よく過ごせる

ジオパークを目指して

参加者 28名（聴覚身障者の方も参加・手話通訳による情報の伝達）

参加想定者 ジオパーク関係者・UD（ユニバーサルデザイン）に興味のある方

コーディネーター 西島昭治（霧島UDフォーラム）

丸橋 暁 山本浩之

（ジオパークのUDを考える会）

第1日目（10月6日 14:00～16:00 様似小学校 フリースペース

開会式会場から分科会会場が離れているためバスで移動する。

小学校は統合して町内1校であり、建設後まもなく近代的な校舎のフリースペースで行う。

今回の大会は、大会開催要項の日程を中心とした印刷物のみで、分科会に関する資料(印刷物)は一切ないため報告書類の取りまとめに苦労する。

このため、記録映像から報告文を以下作成し報告する。

分科会の第1日目は、コーディネータのUDの説明、身体障がい者を案内するときの車いすの活用方法の使用説明、その後グループ討議が行われた。

説明主題

自然災害とユニバーサルデザイン ～すべての日知が心地よく過ごせるジオパークを目指して～

日常生活で余り耳にしない言葉「**ユニバーサルデザイン(UD)**」について認識した上で報告書を読まれることが必要と考え概念を以下記す。

障害のある人の便利さ使いやすさという**視点**ではなく、障害の有無にかかわらず、すべての人にとって使いやすいようにはじめから意図してつくられた製品・情報・環境のデザインのこと。共用品・共用サービスと訳されたり、「**UD**」と略す表記もある。「福祉用具」のように対象者を特定化する視点は**ハンディキャップ**によって使用するものが違う、選択肢が限られるといった状況を生み**ノーマライゼーション**を阻む要因ともなる。米国ノースカロライナ州立大学の「**センター・フォー・ユニバーサル・デザイン**」所長ロン・メイスが提唱し、ユニバーサルデザインの原則として、「誰でも公平に利用できる」「使用において**自由度**が高い」「使用方法が簡単にわかる」「必要な情報がすぐに理解できる」「ミスや危険につながらないようなデザイン」「無理のない姿勢で少ない力で楽に使用できる」「使いやすい大きさ」の7つを挙げている。

(中谷茂一 聖学院大学助教授 / 2008年)

以下 コーディネーター 西島昭治(霧島UDフォーラム)が分科会で説明した概要を報告します。

ユネスコが認定するプログラム

世界遺産

1073の世界遺産が167か国に存在(206の自然遺産&35の複合遺産を含む)

生物圏保存地域(ユネスコエコパーク):669のエコパークが120か国に

ユネスコ世界ジオパーク

127のジオパークが35か国に

ユネスコ世界ジオパークは世界遺産やユネスコエコパークと何が違うの?

生物圏保護区～「生物多様性」の調和した管理に焦点

世界遺産 ～「優れた普遍的な価値を持つ自然と文化の遺跡」の保護を促進

ユネスコ世界ジオパーク

～地域のコミュニティと積極的に関わって「地球の多様性を守り伝える重要性と意義」を国際的に認識させる～

ユネスコ世界ジオパークは国際的な地球科学的意義のあるサイトや風景が保護・教育・持続可能な発展という総合的な概念で管理される

国際的な地球科学的意義のあるサイトや風景（地球遺産）は地球の歴史を記録しており、それを読み解くことで地球の未来を予測する。
このような地球遺産は人類共有の遺産であり、後世に残す必要がある

地球温暖化・地震・津波・火山・豪雨・地すべり・土石流……
全て過去に発生しており、地層や地形、自然環境として、そして
人々の文化や歴史として記録される

ユネスコ世界ジオパークは国際的な地球科学的意義のあるサイトや風景（地球遺産）が、保護・教育・持続可能な発展という総合的な概念で管理される

その地域の地球科学的特性およびそれらと自然・文化の関連性を理解することで、気候変動や自然災害などのリスクなど、社会が直面する問題の解決を図る

歴史の中、そして現代社会における地域の地球遺産の重要性を認識することにより、地元の人々に地域の誇りを与え、そこに住むものとしての認識を強化する

ジオパークの大目標：人と地球の持続的発展

ユネスコ世界ジオパークは、関係するすべての地方および地域の利害関係者および当局（例えば、土地所有者・コミュニティグループ・観光事業者・先住民および地方組織）を含むボトムアッププロセスによって確立される

誰かに言われたからやるのではなく自分たちでやる
ボトムアップ

ジオパークは人!!

UNESCO Global Geoparks は人々に関するもの!!

利害関係を超えた、全てのコミュニティの参加が原則
彼らに誇りを持たせ、一人一人、

そしてコミュニティの強化を促進する
住民を自らの地域スペシャリスト

「ジオパーク・アンバサダー」とみなす

地球活動を全人類が理解するのにツーリズムは最適!!
なぜなら

受け入れる側(住民)、
理解しないと説明できない(学び)
来訪者：様々な体験を通じて

地域の特性を楽しみながら
理解する
そして
持続的発展の下支えとなる経済効果

ジオツーリズムを通じた新たな収入源が生まれ
革新的な地元企業、新しい雇用
質の高いトレーニングコースの
創造が促進される

ユニバーサルデザイン (Universal Design : UD)とは？

できるだけ多くの人々が利用可能であるように製品・建物・空間をデザインすること
バリアフリー：「身体障害者が社会生活を営むうえで、支障がないように施設設計をすること。またそのように設計されたもの」
バリアフリーデザインが「障害者を前提」とし、バリアを克服しようとするものであるのに対して、
UDは、「多様な人たちがともに暮らすこと」を前提に、より一般的に、民族や文化、性、年齢、能力などの差異を問わず、利用できる生活環境を目指すもの、そもそものバリアを取り払い「みんな」が心地よく生活できる」空間をつくる。

ジオパークの理念

- 地球は過去から現在、そして今後も常に活動し続ける様々な減少を生じさせる。人や自然はそれに影響され続ける
 - 多様な地球活動により多様な人が地球上に生活
- ◎「地球と共生する持続可能な社会」を実現

X

過去のジオパーク全国大会で UDについての分科会の話し合いの内容は

- 第6回霧島大会
 - ・ジオパークにおけるユニバーサルデザイン
ジオパークはすべての人に開かれたものであり
すべての人がつどうものである
ユニバーサルデザインはそれを実現するための

重要なツールであり、
個々の努力と配慮により様々な
対応が可能となる
そこに暮らす人にとって
危なくないか、不便じゃないか
便利か、楽しめるか
そこを訪れる人にとって
便利か、楽しめるか

●第7回伊豆半島大会

- ・キーワードは「連携」
- 連携していないとそもそもUDにならない。
様々な立場の人の視点が必要、
ネットワークの中には良いものが
隠れている。それを共有。
- ジオパークは全ての人のも
そのためにUDが必要
- UDには連携が必要。
様々な人が関わることで
様々な視点が与えられる
- 各地には様々な経験と挑戦があり
それをネットワークで共有することで
ジオパークそのものがUD化される

まとめ ジオパークでのユニバーサルデザイン

- 地球の性質を理解し共生する
- 全ての人が心地よく生活できる空間をつくる
- できることからコツコツ、日ごろから考えることが大切
- 多くの人が参画する必要あり、連携が重要!!
- 継続は力なり
・・・「みんな」が心地よく
生活できる空間をつくる・・・

以上が第1日目の分科会6の講義内容
その後、4～5名のグループに分かれて話し合う。

第2日目（10月7日 09:50～12:30 様似小学校 フリースペース

第2日目（10月7日 09:50～12:30

様似小学校 フリースペース

浦河町のホテルを午前8時30分に発ち様似町に。中央公民館前から分科会会場行きのバスに分乗会場の様似小学校に。

予定より早く、午前9時45分から分科会討議前日に引き続き参加する。

11時40分から5グループでの話し合い結果を5～10分以内で発表する。5グループ討議の発表内容を分類すると、

①討議発表で出された災害発生前の取り組み……………

- ・何よりもハード面の整備が必要～
長期避難所開設を想定した備品の整備が必要では
- ・地域における過去の災害発生状況の確認（学習会等を通して）
- ・雨の前後の裏山の確認～
降雨量の安全上限を知る
地すべりなどの事前調査と確認
危険箇所の調査
避難場所・経路の確認を
- ・日常的に地域弱者の把握～
身体障害者・視聴覚障害者の把握
独居高齢者の子息等の連絡先の把握を地域ぐるみの取り組みが必要では。
災害弱者対応の基礎知識の習得が必要
- ・通学道路の確認
- ・防災教育の推進
- ・防災ハザードマップの作成～
作成配付に終わるのでなく、日ごろから住民の認識が必 8
では。
ハザードマップの多言語化表記が必要では
- ・高齢者に心くばり～
一人暮らし老人等への声かけ
サポートが必要な方々の把握
日常から移動手段の確認(車・徒歩等)を
高齢者の避難困難対策と実態把握
- ・安全避難のために～
寝室に履物（長靴等）を置くことが必要では
- ・応急手当法の習得と確認が必要
- ・避難訓練の実施～
- ・被災経験者の話しを聞く
- ・子どもたちを含めた地域防災についての学習会が必要
- ・伝言ダイヤルの使用方法の理解（周知）
- ・非常食の準備と水の確保～
最低3日間位の食糧の備蓄
避難時持ち出しの避難袋の定期的確認が必要

- ・災害発生に備えて～

懐中電灯、ラジオ、ポータブルストーブの日常からの準備、
携帯電話の充電の習慣化

- ・避難指示等の広報活動の多言語化の準備
- ・行政職員も地機住民も「地域」を知ることが必要
- ・地域防災計画を住民も理解が必要

②災害発生後の取り組み・・・・・・・・・・・・・・・・

避難直後

- ・自分自身の家族の確認
- ・地域住民の避難状況の確認

避難所生活と運営

- ・正しい被災状況の提供と情報の共有
- ・暑さ、寒さ、風呂、感染症、衛生面等の対策
- ・病院(通院)のための情報収集
- ・避難所のプライベート、空間の確保
- ・高齢者に配慮した避難所(簡易ベット、トイレ、手すり等の配慮が必要では)
- ・帰宅困難者を配慮した避難所運営
- ・災害発生を後世に伝える～

防災教育(こども)で過去に被災した方の体験談を聞く
過去に発生した土石流災害を見直す

添付資料

第9回日本ジオパーク全国大会アポイ岳大会の様子をDVDにて添付するので参考にされたい。